

令和六年度 入学試験問題 (2期)

国語総合・現代文B

第1問 次の文章を読んで、後の問(問一～問六)に答えよ。

社会に参加するとはどういうことだろうか。「市場」それ自体がまだ十分に発達していなかった、かつての共同体において、参加するとは、村落や家族などの閉鎖的な集団に永続的に帰属することであった。人々はある共同体の一員であり、そのことがそのまま人々の社会においての役割や義務を意味していた。

個人の自由と自立を掲げ、「市場」を大きく発展させた近代は、このような帰属参加の関係を解体し、ある人の社会での役割や他者との関係の結び方を、多様な形に編み直していく。A、ショッピングモールの販売者と顧客、あるいは顧客同士の関係に示されるように、今日の高度な消費社会における多くの人間関係は、表面的には誰にでも開かれて

おり、名乗り合う必要もない。B、開放性と匿名性が特徴である。また人々が、顧客として、販売店のパート従業員、図書館の受付係、カフェのアルバイト従業員などとかかわりあう場合、その関係の結び目はゆるく、ある販売者と顧客の関係は、すぐに別の販売者と顧客の関係に取って代わられるというように、一過的な関係が連続的に繰り返しられる。従業員は同じ文言で人々を次々に迎え入れ、同じ文言で次々に送り出す。さらにイベントと一緒に楽しんだ、ぶらぶら歩きの人々、カフェで共に日曜の午後を過ごした顧客同士も、名乗り合うわけでもなく、ただ同じ時間にそこにいた、というにすぎない程度の、関係といえないほどの関係の中におかれている。

常連さんだけにだけ情の深いサービスを提供するような店が今でもないわけではないし、家を借りるとか買うというような取引になれば、市場においても匿名性や一過性は否定されるだろう。C 現代はますます市場の開放性が要求され、

常連さん相手の旧来のやり方は、大金持ちの（注1）メンバーズクラブのような特殊な市場を除けば、流行^{はや}らない。ショッピングモールのように、どのような人々も、どこの誰ともたずねられることなく、顔のはつきりしない関係をそのつど結ぶのである。

もちろん現代においても、社会はこうした開放的だが、結んではすぐ解けるといような一過的な消費関係だけで成立しているわけではない。ショッピングモールの奥には、ぶらぶら歩きの買い物客たちとは別に、労働にたずさわる「関係者」が存在していた。さらには、このモールに商品や原材料を納入する業者があり、さらにその業者の背後には別の生産者や流通業者の存在があり、おそらくそうした細かな生産と流通の分業関係をたどれば、世界の隅々にまで広がっているだろう。共同体への帰属が、その共同体での労働への参加をそのまま意味しているのは異なっており、市場社会の表面をぶらぶら歩く顧客である限りでは、たとえば自分の飲むコーヒー豆がどこかの国の児童労働に担われているかもしれないというような、背後に隠れた分業関係の広がりやその実態を知る必要はない。だがそうしたモールの顧客自身も、たいていの場合、何らかの労働にたずさわる「関係者」の、どこかの網の目に参加して、収入を得ている。

市場社会の表面に張られた、一過的で開放的な消費関係に比べると、その奥にある労働や管理、業者間取引の「関係者」の社会は、相対的に閉鎖的な関係であることに特徴がある。「関係者」はネームプレートを付け、相互に名前呼び合い、契約書を交わし、規律に従うことを求められる。働く職場は「ウチの会社」であり、同僚や取引業者とは、ときに食事や飲み会に誘い合う。もちろん、この職場集団の形成や業者取引もまた、今日では永続的なものでなく、ますます一過的なものになっており、たとえば最近その数が増えている多種の非正規雇用においては、関係の結び目は相当ゆるいが、それでも消費ほどには開放的ではない。そこに参加するには、「手続き」や他者からの「許可」が不可欠であり、履歴書だとか契約書だとか、身元証明などが、簡便なものであれば必要になる。

さらに、この市場社会とは別に、人々は家族の一員であり、家族関係の中でさまざまな資源を分かち合っている。家族の親密なパーティを覗^{のぞ}けば睨^{にら}まれるような親密な閉鎖性がそこにはある。家族の周辺にも多様な人々との任意の関係があ

り、それらの人々とも生活のある部分を共同している。また、たいていの場合人々は生まれたときからある国家や公共団体のメンバーであり、メンバーとしての届け出を介して、国家や公共団体の政治への参加が促されていく。同時に、そのメンバーとしての資格で、学校制度に組み入れられ、医療や福祉を含めた公共サービスの提供を受ける。

これらの市場の外の公私の関係は、市場社会に先立つ共同社会にその源をもち、人々の生活や労働の継続性、親密な人間関係による安定などを支えているが、その閉鎖性や継続性には濃淡があり、顔の見える共同関係から、形式的なメンバーシップまで多様である。家族や職場集団も永遠とはいえず、たえず変化していくし、移動の自由は住む場所を特定させない。国を超えた労働者の移動もますます拡大している。だがこれらの関係は、市場のような開放性はもたず、むしろ人々の関係を、ある特定メンバーと特定地域の中に、一定の期間ではあるが、枠づけていくような機能をもつ。

現代の社会は、知らない者同士の匿名のままの関係の網の目が開放的で世界の隅々にまで広げられていると同時に、相対的に閉鎖的な特定範囲の人々や地域の集合体でもある。「社会に参加する」とは、参加＝帰属でもなく、またこのすべての社会の網の目に入り込み、すべての「関係者」であることでもない。たとえば職場には参加するが結婚しない「独身主義者」や、あるいは結婚するが職場には参加しない「主婦」、ということがむろんありうるし、隣の人と付き合いがないからといって生活がなりたたないということはない。「関係者」であったり「関係者以外」であつてもかまわないのである。社会へ参加するとは、こうした複雑な関係の網の目の中で、その人らしく生きていくために、必要な関係を選び取って、その網の目の中に入り込んでいくことであり、またそれを変更していく行為でもある。

このように見ていくと、社会参加とは、複雑で変化する社会の諸関係の大海の中を、「自由と選択」という近代の基本価値を頼りに、おぼつかなく泳ぎまわっているようなイメージが生まれてくる。法学や経済学などが理論的な前提にするのも、このような自立する「個人」であり、それらの集合体としての社会である。だが、実際にある人が必要な関係を選び取って、ある社会の網の目の中に入っていくという行為は、その人の「自由と選択」だけに基づいているわけではない。むしろ共同社会の帰属に類似した、あるメンバーシップの証明や、その人の「場所」＝ホームの確認が、一定の網の

目の中に入る「許可」の条件になつてゐることが少なくない。「自由と選択」は、こうした存在証明の上に立つてはじめて認められてゐるともいえる。

現代社会が市場関係だけでなく、公私の相対的に閉鎖的な集団のメンバーとしての関係を含んでゐることはすでに述べた。人は、「自由と選択」の主体である前に、ある家族の中にメンバーとして生まれ、同時にある国や具体的な地域のメンバーとして届けられてゐる。むろん繰り返し強調してゐるように、それらは共同社会のような永続性はなく、変化するものであるが、複雑な社会諸関係の大海の中では、そこがとりあえずの人々の「定點」でありアイデンティティの拠り所として機能する。ショッピングモールをぶらぶら歩いてゐる人々にも、普通はそこから来て、そこへ帰る「定點」としての「場所⇨ホーム」があると想定されるわけである。

職場集団の「関係者」として「許可」されるためには、たとえば国籍や住民証明、履歴書や連絡先、場合によつては^(注2) 職域組合への帰属証明などが必要であり、他方で、ある職場集団の「関係者」であるという証明が、次の就職や結婚などの新たな関係の結び直しの可能性を拡大していく。住民証明や住所がなければ政治への参加も閉ざされるだろうし、社会サービスの利用も制限されるだろう。誰でも利用できるショッピングモールですら、夜間は閉鎖され、帰るべき「場所⇨ホーム」に戻ることを入念に期待してゐる。

さらに重要なことは、こうした^ウ 存在証明や「場所⇨ホーム」には、一定の評価のランキングがあることだ。生まれた国、住んでゐる場所、家の種類や大きさ、勤めてゐる職場の種類や大きさ、卒業した学校、結婚相手の家柄などには、それぞれの社会が付した評価のグレードがある。これらのランキングは人々の「定點」⇨「ホーム」の評価となり、この評価は転じて人々自身の存在証明の確かさや評価につながり、それが参加の機会に影響を与えていく。

ある人々は、その所属する会社や、学歴、住んでゐる場所などから、文句なく立派な市民であると見なされ、その「信用」を基礎に多様な参加を選択しうる機会に恵まれる。他方で、別の人々はそのような価値づけが低く、場合によっては社会の一員としての資格を疑われることすらあるかもしれない。それらの人々の参加の機会はさらに狭められることにな

ろう。

もちろん、たとえば労働者を募集する企業が、応募者の評価をどの程度厳しくするかは、時々々の経済情勢や労働市場の狭隘きょうあいさの程度によって変化しよう。多くの労働者が緊急に必要であれば、評価ランキングのより下のほうにまで参加の機会が開放されるかもしれない。地域に新たに流入する一人暮らし世帯が多くなれば、そうした人々を取り込んだ地域活動が考案されていくかもしれない。

いずれにせよ、今日では人々はますます開放的で、世界の隅々に広がる多様な社会関係に参加することが奨励され、その中で生きていく。しかしこうした参加は、実はいくつかの閉鎖的な集団のメンバーとしての存在証明の提示や、帰るべき「場所」ホームや「定点」におけるアイデンティティの形成を前提とし、そうした「定点」の確認作業やその評価の程度によって、開かれたり閉じられたりしている。人々の社会関係は、こうした X の矛盾に満ちた展開の中で、取り結ばれていくのである。

(岩田正美著『社会的排除——参加の欠如・不確かな帰属』に基づく)

(注) 1 メンバークラブ……会員として認められた者のみがサービスを受けることができる飲食店など。

2 職域組合……同一職業・職種に従事する労働者によって組織された労働組合。

問一 空欄 ～ に入る言葉の組み合わせとして最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

解答欄は、。

- | | | | | | | |
|---|---|-------|---|-------|---|------|
| ① | A | 具体的には | B | ところで | C | ただし |
| ② | A | もちろん | B | 要するに | C | なぜなら |
| ③ | A | たとえば | B | つまり | C | だが |
| ④ | A | たしかに | B | このように | C | しかし |

問二 傍線部ア「常連さんにだけ情の深いサービスを提供するような店」とあるが、このような店の客との関係はどのようなものか。最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答欄は、。

- ① 広く開放的ではないが、一過的な関係。
- ② 誰にでも開かれている、ゆるい結び目の関係。
- ③ 顔がはつきり見えている、一過的ではない関係。
- ④ 匿名性が低い、結んではすぐ解ける関係。

問三 傍線部イ「市場社会」における人々の関係のあり方には、どのような特徴があるか。最も適切なものを、次の①～

④の中から一つ選べ。解答欄は、ウ。

① 職場集団の形成や業者取引は、共同社会への帰属のような永続性をもち、消費関係ほど開放的ではなく、相対的に閉鎖的な関係にある。

② 消費関係において互いに名乗り合う必要はなく、顔のはっきりしない匿名の一過的な関係が連続的に繰り返り広がられていく。

③ ショッピングモールのような、販売者と顧客あるいは顧客同士の関係は、親密で誰にでも開かれた開放性をもっている。

④ 家族や地域社会における人間関係は、共同社会のような開放性もたず、その閉鎖性や継続性は職場集団と同じくたえず変化していく。

問四 傍線部ウ「存在証明や『場所⇨ホーム』の有無やあり方は、人々の社会参加にどのように影響するか。不適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答欄は、エ。

① 必要な関係を選び取って社会の網の目の中に入る「自由と選択」の主体であることを認められるためには、相対的に閉鎖的な集団のメンバーである証明が必要とされることが少なくない。

② ある職場集団に所属する「関係者」であるという証明が、次の就職や結婚などの新たな関係の結び直しの可能性を広げる。

③ ある国家や公共団体のメンバーとしての届け出が、政治参加や教育・医療・福祉などの社会サービスの利用を「許可」されるために必要となる。

④ 存在証明や「場所⇨ホーム」には政府が付した評価のグレードがあり、そのランキングが、所属する会社や地域社会における地位や力関係に影響を及ぼす。

問五 空欄Xに入る最も適切な言葉を、次の①～④の中から一つ選べ。解答欄は、オ。

① 関係者と関係者以外

② 一過性と永続性

③ 消費関係と公私の関係

④ 開放と閉鎖

問六 本文の内容と合致するものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答欄は、

力

。

- ① 現代の市場社会は、結んではすぐに解けるような消費関係ではなく、共同社会の帰属に類似した公私の関係によって成立している。
- ② 現在でも匿名性や一過性をもつ消費関係はあるが、市場の開放性がますます強まる現代においては、いずれ姿を消すと考えられる。
- ③ 「市場」が十分に発達した近代においては、誰もが「自由と選択」の主体であることが認められ、複雑な社会関係の大海の中を泳ぎまわって社会の網の目に入ることが可能になった。
- ④ 現代社会における市場以外の関係は、顔の見える共同関係から形式的なものまで公私にわたって様々なものがあり、人々の関係を特定メンバーと特定地域に枠づける働きも担う。

第2問 次の文章を読んで、後の問（問一～問六）に答えよ。

次の二つの文を比べてみたい。

庭に木がある。

庭で木がある。

最初の文は別に何ともないが、二番目の文は少し変な感じがする。つまり「庭に」は自然だが、「庭で」は不自然である。では、次はどうだろうか？

庭にパーティーがある。

庭でパーティーがある。

今度は逆に、「庭に」は不自然で「庭で」の方が自然である。このように、^ア木とパーティーで「庭に」「庭で」の自然さが違う。なぜだろう？ それはモノとデキゴトが違うからである。

日本語では「モノか、デキゴトか」という区別が重要である。モノの存在場所を表すことばには「に」を付ける。デキゴトの存在場所を表すことばには「で」を付ける。木はモノなので、木の存在場所を表すことばは「に」を付ける。だがパーティーは、始まって、展開して、終了する。つまりデキゴトである。だから、パーティーの存在場所を表すことば「庭」には「で」を付ける。もちろん「科学的」な見方をすれば、木も、誕生し、成長し、枯れていく動的な存在である。だが、そうした木の変化はパーティーなどと比べると緩慢で、私たちの日常感覚ではとらえにくい。むしろ木は、基本的に静止・安定したモノとしてのイメージの方が強い。「木はモノだ」と言うのは、こういう意味である。

いま紹介した文法規則を、規則1としてまとめておこう。

規則1…モノの存在場所を表すことばには「に」を付ける。デキゴトの存在場所を表すことばには「で」を付ける。規則1に加えて、もう一つ、はっきりさせておきたい規則がある。これを規則2としておく。

規則2…状態はデキゴトではない。

これは具体的にいえば、「木がある」はデキゴトでない、ということである。

×庭で木がある。

先ほど見たように、この文は不自然である（文頭の「×」印はこの意味で付けてある）。それは、「庭は木というデキゴトの存在場所」などと考えることができないということだが（木はデキゴトではなくモノである）、同時にそれは、「庭は「木がある」というデキゴトの存在場所」などと考えることもできる。もしそう考えることができるなら、この文は規則1「デキゴトの存在場所を表すことには『で』を付ける」どおりだということになり、自然と判断されるはずだが、実際にはこの文は不自然である。「木がある」というのは、モノが存在するという状態である。モノが存在するという状態は、あくまで状態であって、デキゴトではない。状態とデキゴトは別物である。これが規則2の意味である。

ここで見たことは、昔からよく観察されてきたことである。だが、ここには重大な見落としがあると言わざるを得ない。

たとえば、次のようなAとBの対話を考えてみよう。

A…こういう四色ボールペンみたいな便利なものは、いくら世界が広いといっても、日本にしかないでしょうね。
B…四色ボールペン、北京^{ペキン}にありますよ。

この対話で話題になっている「四色ボールペン」とは、一本で四色（ふつう黒色・赤色・青色・緑色）が書けるボールペンである。そんな便利なものは日本にしか存在しないだろうと言うAに対して、Bは北京における存在を指摘している。このBの発言を取り出してみよう。ここで話し手Bは、私たちが先ほど見た規則1どおり、四色ボールペンというモノの存在場所を表すことば「北京」に「に」を付けている。ここには何の不思議さもない。では、次のような発言はどうだろうか？

「四色ボールペン、北京でありましたよ。」

この発言では、最後の「あります」が「ありました」になっているほか、「北京に」が「北京で」となっている。だが、「四色ボールペン、北京にありますよ」と同様、この発言も「不自然なものではない（この自然さ判断にひっかかりを感じる人は、Bの発言として、たとえば「Cさんが『四色ボールペン、北京であった』って言ってましたよ」のような、他者（C）からの伝聞の発言例をお考え頂きたい。この伝聞の例がかなり自然に感じられるなら、それと近い「四色ボールペン、北京でありましたよ」も話者の差こそあれ、ある程度は自然なのだと理解して頂ければと思う）。実例も挙げておこう。電子ネット上の情報交換所「Yahoo!知恵袋」では、次のような質問に対して、

PS3が結構売れ残っているっていう噂うわさをきいたことがあるんですが、本当でしょうか？ 都内では見たことないんですが。

次のような回答が記載されている。

きのうゲオでありましたよ!!

ゲオ（GEO）という商店における、ゲーム機PS3というモノの存在を、回答者は「ゲオに」ではなく「ゲオで」という形で語っていることになる。

では、一体どうして「四色ボールペン、北京でありましたよ」や「PS3、ゲオでありましたよ」などは不自然ではないのだろうか？ 一体どうなっているのだろうか？

「四色ボールペン、北京にありますよ」という発言は、四色ボールペンが北京において存在すると知っていれば誰にでもできる。

これに対して「四色ボールペン、北京でありましたよ」という発言はそうではない。他人から聞いて知っただけという話し手なら、こんな発言はしにくいだろう。この発言の主として最も思い浮かびやすいのは、最近、北京を観光してきたばかりの人、「北京の体験談」をしそうな人である。つまり「四色ボールペン、北京でありましたよ」という発言は「見

てきた」「味わってきた」といった、体験の発言である。北京旅行から帰ってきた人は、北京における四色ボールペンの存在を、知識として発言できるだけでなく、体験としても発言できる。ゲオという店でPSS3を見かけた人についても、同様のことが言える。

これまでの文法研究は、こうした個人的な体験の発言に十分な注意を払わず、ある庭における木やパーティーの存否といった、一般的な知識の表現を中心に進んできた。先ほど紹介した二つの規則がその例である。これは知識の表現の説明には有効な、いわば知識の文法である。もう一度まとめておこう。

知識の文法

規則1…モノの存在場所を表すことばには「に」を付ける。デキゴトの存在場所を表すことばには「で」を付ける。

規則2…状態はデキゴトではない。

だが、知識の文法は体験の発言を説明できない。知識の文法とは別に、体験の文法を考える必要がある。

体験の文法が知識の文法と決定的に違うのは規則2である。規則1は知識の文法と変わらないとしても、規則2は次のように考えなければならない。それが体験の文法である。

体験の文法

規則1…モノの存在場所を表すことばには「に」を付ける。デキゴトの存在場所を表すことばには「で」を付ける。

規則2…状態はデキゴトである。

「四色ボールペンがある」というモノ（四色ボールペン）の存在状態は、知識の発言としてはただの状態にすぎない。だが、体験の発言としては、この規則2のとおり、立派なデキゴトである。なじみのない北京の街を、「どんな様子だろう」「何があるだろう」と、好奇心のままにあちこち探検する話し手にとって、あるところ（たとえばあるスーパーの文具売場）で四色ボールペンを見かける、**A** 自分の目の前に四色ボールペンがあるというのは、立派なデキゴトである。そのデキゴトが北京において存在しているので、規則1どおり「北京で」でよい。

知識の文法では、状態は状態でしかない。B、体験の文法では、状態はデキゴトでもある。つまり体験は状態をデキゴト化する。C、なぜ体験は状態をデキゴト化するのか？——この問題は私の中で、長らく、大きな疑問としてくすぶっていた。疑問が解けたのはつい最近のことである。

ここに一曲の歌がある。これは、「17才」という人気歌謡曲で、聞き覚えがあるという人も多いかもしれない。

誰もいない海

二人の愛を 確かめたくて

あなたの腕を すりぬけてみたの

走る水辺の まぶしさ

息も出来ないくらい

早く 強くつかまえて来て

好きなんだから

私は今 生きている

作詞・有馬三恵子ありまみえこ 作曲・筒美京平つつみきょうへい（一九七一年）

私がこの歌を久しぶりに聞いたのは、ある居酒屋の有線放送か何かである。

最初は特に気にも留めていなかったが、最後の歌詞「私は今 生きている」の部分に、頭を殴られるようなショックを受けた。

言語研究者が考えるデキゴトとは、「一郎が二郎を殺す」や「二郎が死ぬ」のような、力のやりとりや発散、あるいは時間の進展に基づくデキゴトばかりである。それに満足できず、「体験は状態をデキゴト化する」と考えた私にしても、

なぜ体験が状態をデキゴト化するのか、さっぱりわからずにいる。だが、答えは「17才」の女性が与えてくれているのではない。「四色ボールペン、北京でありましたよ」などの文をたよりに、私がぼんやり探り当てたデキゴトとは、結局のところ「私は今 生きている」というデキゴトであったのだ。

なぜ体験が状態をデキゴト化するのか？——今の私なら(注) 莞爾かんじとして笑い、こう答える。一瞬の状態は、たしかにそれじたいでは状態ではない。だが、私たちがその状態を「生きる」ことによって、その状態は、私たちの人生の一部となり、立派なデキゴトとなるのだ。なぜかというと、私たちの人生は、一瞬一瞬の、「生きている」というデキゴトの積み重ねだからだ。

(定延利之著『煩惱の文法』に基づく。ただし、出題に際し省略したり改行箇所を変更したりなどしている。)

(注) 莞爾として……いかにも満足げにっこりして。

問一 傍線部ア「木とパーティーで『庭に』『庭で』の自然さが違う」とはどういうことか。その説明として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答欄は、ア。

① 日本語では「モノか、デキゴトか」という区別が重要であるが、静的か動的かは日常感覚では捉えにくいので、本的には二つの文法規則によって静的か動的かが判断される。木は静的なので「に」を、パーティーは動的なので「で」を付ける。

② 日本語では「モノか、デキゴトか」という区別が重要であり、存在場所を表す際にモノには「に」を、デキゴトには「で」を付ける。木はモノなので「に」を、パーティーはデキゴトなので「で」を付ける。

③ 「に」と「で」は存在場所を表す言葉に付けられる。始まって展開して終了するデキゴトであるパーティーが存在する場所には「で」が付き、誕生し成長し枯れていく木というモノの変化が存在する場所には「に」が付く。

④ 「に」と「で」は存在場所を表す言葉に付けられる。木は変化が緩慢であり、庭が静的な存在場所となるので「に」を付け、パーティーは動きが激しく、庭が動的な存在場所となるので「で」を付ける。

問二 傍線部イ「四色ボールペン、北京でありましたよ」という発言は、例文「庭に」「庭で」で説明されている文法規則を適用すると、本来は不自然だということになる。それはなぜか。その理由として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答欄は、イ。

① 「で」を付けるのはデキゴトの状態を指し示す場合であり、四色ボールペンの静止・安定した状態を表すならば「に」を使うほうが自然だから。

② 「で」を付けるのはデキゴトの状態を指し示す場合であり、四色ボールペンのモノの特性を表すならば「に」を使うほうが自然だから。

- ③ 「で」を付けるのはデキゴトの存在場所を指し示す場合であり、四色ボールペンの存在という知識を表すならば「に」を使うほうが自然だから。
- ④ 「で」を付けるのはデキゴトの存在場所を指し示す場合であり、四色ボールペンというモノの存在場所を表すならば「に」を使うほうが自然だから。

問三

傍線部イ「四色ボールペン、北京でありましたよ」という発言が、傍線部ウ「不自然なものではない」といえるのはなぜか。その理由として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答欄は、ウ。

- ① 北京における四色ボールペンの存在を、実際に訪れて体験したうえでの発言だと考えると、この発言がデキゴトとして捉えられるから。
- ② 文末が「ありました」という過去形になることで、継続している状態ではなくすでに終わったこと、すなわち状態ではなくデキゴトであると捉えられるから。
- ③ 「Cさんがそんなふうに言っていましたよ」という伝聞発言のように、一步引いた客観的な発言だと考えると、デキゴトに近い自然な表現として捉えられるから。
- ④ 北京に四色ボールペンがあるということ自体は状態に過ぎないが、知識が状態をデキゴト化していると捉えられるから。

問四 空欄 に入る言葉の組み合わせとして最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

解答欄は、。

- | | | | |
|---|--------|--------|-------|
| ① | A ただし | B あるいは | C しかし |
| ② | A しかし | B ただし | C むしろ |
| ③ | A すなわち | B しかし | C つまり |
| ④ | A つまり | B だが | C では |

問五 本文の内容と合致するものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答欄は、。

- ① 存在場所を表す言葉に付ける「に」と「で」は、対象がモノかデキゴトかで使い分けられる。一般的にはこの決まりが適用されるが、体験の内容によつては適用されないことがある。
- ② これまでの文法研究では、一般的な知識の表現に関心が向けられ、個人的な体験の発言に注意が向けられなかった。新たに体験の文法を考えることが必要であり、その文法では体験は状態をデキゴト化すると捉える。
- ③ 体験の文法では、状態はデキゴトでもある。そのように捉えられるのは、私たちが一瞬の状態を「生きる」ことによつて状態をデキゴトのように錯覚し、知識の文法から体験の文法へ転換しているからである。
- ④ 体験の文法において体験が状態をデキゴト化する仕組みを知る手がかりは、人気歌謡曲「17才」の歌詞にある。「私は今 生きている」とあるように、一瞬を生きていることが記憶を動的なものに変えるからである。

問六 この文章の全体構成についての説明として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答欄は、

カ

。

- ① まず、具体例から本文全体にわたる大きな問いを明示している。続いて一般的な解釈とそれに対する反例を挙げて新たな考え方を示している。最後に研究の成果をふまえた今後の展望を述べている。
- ② まず、知識から導かれる仮説を示し、続いて体験から導かれる新たな知見を提示することで従来の研究の問題点を指摘している。最後に人気歌謡曲の歌詞を引用して自説の正しさを証明している。
- ③ まず、よく知られている研究成果とこれまで見過ごされてきたまれな事例を対比的に取り上げている。続いて、異なる二つの考え方が生まれた経緯を、人気歌謡曲の歌詞を手がかりに説明している。
- ④ まず、従来の研究でよく知られていることを示し、続いて従来の研究で見落とされてきたことについて具体例を挙げて指摘している。そして、独自の考えを提示して、その考えに至った経緯を示している。

第3問 次の各問（問一～問六）を読んで、それぞれの指示に従って答えよ。

問一 次のA～Dの傍線部のカタカナと、各群の①～④の傍線部のカタカナが同じ漢字となるものを、それぞれ一つ選

べ。解答欄は、A ア・B イ・C ウ・D エ。

A 注意力が散マンだ。

B 宴会の後シ末をする。

① マン画の本を買う。

① シ事を終えて帰宅する。

② マン性胃炎で病院に通う。

② 会議のシ会をする。

③ マン場一致で採択される。

③ 原シ時代のような生活を送る。

④ 風邪はマン病のもとだ。

④ 被災者をシ援する。

C 見トウ違いの意見を言う。

D 無ボウな計画を立てる。

① トウ論会に参加する。

① ボウ力をふるう。

② トウ意即妙の受け答えをする。

② 進路をボウ害する。

③ 質疑応トウの時間をとる。

③ 陰ボウを企てる。

④ 皆の意見をトウ括する。

④ ボウ命者を受け入れる。

問二 次のA～Eの各群において、漢字の読み方（カタカナ表記）が正しくないものを、それぞれ①～④の中から一つ選べ。解答欄は、A ・B ・C ・D ・E .

- A**
- ① 眉間（ミケン）
 - ② 供養（クヨウ）
 - ③ 凡例（ボンレイ）
 - ④ 成就（ジヨウジユ）
- D**
- ① 句読点（クトウテン）
 - ② 正念場（シヨウネンバ）
 - ③ 性悪説（シヨウアクセツ）
 - ④ 為政者（イセイシヤ）

- B**
- ① 為替（カワセ）
 - ② 思惑（オモワク）
 - ③ 苦行（クギョウ）
 - ④ 嫌悪（ケンアク）
- E**
- ① 滴（シタタ）る
 - ② 懐（ナツ）く
 - ③ 戒（イマシ）める
 - ④ 授（アズ）ける

- C**
- ① 便乗（ビンジョウ）
 - ② 本望（ホンボウ）
 - ③ 一献（イツコン）
 - ④ 更迭（コウテツ）

問三 次のA群・B群において、対照的な意味を表す語句の組み合わせとして三つとも正しいものを、それぞれ①～④の

中から一つ選べ。解答欄は、A コ ・ B サ 。

A

④	③	②	①
機敏	寛容	濃厚	抽象
—	—	—	—
過敏	厳格	希薄	具体
—	—	—	—
違反	臆病	義務	申請
—	—	—	—
遵守	豪胆	権利	却下
—	—	—	—
解雇	需要	粗野	模倣
—	—	—	—
雇用	供給	綿密	創造

B

④	③	②	①
絶対	是認	給水	秘密
—	—	—	—
相對	容認	排水	当然
—	—	—	—
浅慮	順境	概論	落第
—	—	—	—
深慮	逆境	総論	及第
—	—	—	—
点在	応分	横柄	衰亡
—	—	—	—
密集	過分	謙虚	興隆

問四 次のA群・B群において、傍線部の送り仮名の付け方が不適切なものを、それぞれ①～④の中から一つ選べ。

解答欄は、A シ ・ B ス 。

- A
- ① 温かいスープを飲む。
 - ② 短かい夏になりそうだ。
 - ③ 著しい進歩を遂げた。
 - ④ 賢い判断を下した。

- B
- ① 注文を承る。
 - ② 目測を誤る。
 - ③ 事業を営む。
 - ④ 眠気を催おす。

問五 次のA～Dにおいて、空欄に最もよく当てはまることわざを、それぞれ後の①～④の中から一つ選べ。

解答欄は、A セ ・ B ソ ・ C タ ・ D チ 。

A いくら意見をしても で、親の言うことなど知らん顔だ。

B 安く買った株が急騰し、思いがけず ことになった。

C と言うが、あんな人に助力を求めるなんて。

D とはよく言ったものだね。ほら、今話したAさんが来たよ。

- ① 仏作つて魂入れず
- ② 海老で鯛を釣る
- ③ 帯に短し襷に長し
- ④ 溺れる者は藁をもつかむ
- ⑤ 瓜の蔓に茄子はならぬ
- ⑥ 鶉のまねをする鳥
- ⑦ 噂をすれば影がさす
- ⑧ 馬の耳に念仏

問六 次のA～Cにおいて、傍線部の語句の使い方が適切なものを、それぞれ①～④の中から一つ選べ。

解答欄は、A ツ ・ B テ ・ C ト。

A うやむや

- ① うやむやした気分で登校する。
- ② 道がぬかるんでうやむやしている。
- ③ うやむやな態度をとる。
- ④ うやむやしく一礼する。

B もとる

- ① 人の道にもとる行為。
- ② 家族にもとる間柄。
- ③ ライバルにもとる成績。
- ④ 昨年にもとる暑さ。

C 心酔

- ① 心酔するように眠っている。
- ② 日本の将来に心酔する。
- ③ 夏目漱石（せきせき）に心酔している。
- ④ 過去の過ちを心酔する。

〔国語の問題は以上です〕